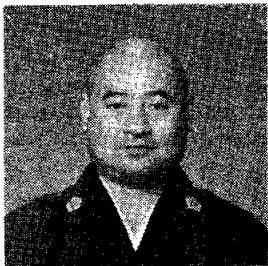


## 自然雑感

佐々木 隆元



わが国への佛教伝来と共に、ジャンケンホイという遊びも流布したらしい。このジャンケンホイはリヤンケンホイが訛ったもので、漢字で書くと「料

簡法意」という佛教用語です。料簡は考える・思案する。そして法は真理・理法。意はここから、真理を意として考えよ。理法に則り思案せよ」となります。不思議な掛け声ですよ。

御存知の通り、仕組は石(グー)、鉄(チョコキ)、紙(パー)のいずれかを、互いに出して勝負をつける訳です。石は鉄に勝つけれど紙に負ける。紙は石に勝つけれど鉄に負ける。鉄は紙に勝つけれど石には負ける。三者三辣みの関係です。

良く考えてみると、絶対に強いものもなければ絶対に弱いものもない、みな平等なのです。一つ一つが個性を持ちながら、本質的には対等です。しかし平等であるけれど、その時々で一応の決着をつける。故に勝っても負けても恨みっこなしよ」となります。

大自然界に於けるすべての存在は、まさにこのパターンに則しています。真理・理法は万物を貫いて、平等に遍在しておりますから、万物の差別相はそのまま本質的に平等です。すべての存在は、みな真理の現われである。これが佛教の自然観、生命観です。

話は変わりますが、この自然界の食物連鎖を見ると、一応弱肉強食の形となっています。しかし再応すると植物も動物も、バランスを保ちつつ今日まで種

を存続させてきている、言葉を変えれば自然が自然である限り、差別即平等な筈です。

ミクロよりマクロに至るまで、生命あるものも含めてすべての存在は、持ちつ持たれつ係わり合って立体重層の、共存共栄の世界を織り成している、これが自然界でありましょう。

だけれども、現代の人間の在り方から自然を考えてみると、人間を取り巻く環境もしくは外の世界程度にしか考えていないようです。人間に対する自然であるから、資源として利用できるものは利用する。その範囲を越えなければ良いのだけれど、人間の激しい欲望を満たすために、さらには一部の人々の利益のために、自然破壊へと転じてゆくのです。

古来東洋では、人間も自然の生命連関の中の一つで、共に生き、生かされたと信じてきた。だから乱伐や乱獲など戒めてきた筈なのです。冥利、冥加と受け止めるつましい心の姿勢があったのであります。

環境汚染、自然破壊が叫ばれて久しいけれど、このまま生物たちの種が減り続け、生態系が崩されてゆくならば、その先は人類の滅亡に到らざるを得ない。

料簡法意・ジャンケンホーイの真義を、私たちは真剣に哲学しなければならぬ時節でありましょう。

ここまで読み進んできて、随分抹香くさいと思われたかも知れません。自己紹介が遅れましたが、私の職業は真言宗所属の僧侶です。現在、名寄自然に親しむ会の会長を務めております。親しむ会命名の謂は、自然を体感し共生の道を考える、情的な面にウェイトがあつたようです。もとより調査探究という知的な面も根底にありますけれど……。

昭和六〇年、栗林財団の助成をいただいて、日本最北のビヤシリ高層湿原の調査を行うにあたって、名寄の野の花の会、野鳥の会、地学の会、天文の会が合同して発足したものです。今では郷土の自然環境を調査して、大切なものは保全するべく努力しております。しかしまちづくり、まちおこしが盛んになってそのために自然が後退したり、また無関心のままに破壊に繋がることもあり、会員も自然との共生を掲げながら、まちづくりに提言をしております。豊かな自然があつてこそ文化は、高く、広く、深く展開するものでしょう。造花の桜や楓では、詩歌も絵画も生まれず、酒さえもまずくなるでしょう。そして何よりも自然がなくなれば感性が鋭く豊かになることはない。豊かな自然こそ良い景観を創り、住みやすい環境を生むものと信じます。

今夏八月九・一〇・一一日の三ケ日、

自然観察指導員の講習が、名寄のビヤシリスキー場ロッジを拠点に開催されました。高名な講師先生の顔ぶれを見て、何とか参加したいと思い、盆行の真只中でしたが日程をやりくりして実現にこぎつきました。

その講習会で強烈に印象づけられたことは「自然を五感を通して体験してほしい」。森林を全身で感じてほしい」というお話でありました。そしてさらに森の中で、先生の指示で直経二五歩程のトド松に耳をつけました。目を閉じ息を深く吸い込みました。シューシューという音が木の幹の中から聞こえてきたのです。「本当だ、木は生きている」という感動が五体貫ぬきました。

思えば誰しもが「木は生きている」とは知っているでしょう。でも生きていくという実感として感動は、指示されなければ気がつかないものです。すべての知識も、感動があつてこそ智慧となります。あえて智慧と書きました。智という字は知と弓(言語の義)と白の合字です。物事を明白に知ること。そして慧は井(ホウキ)と手(手)で、手でホウキを持つ形。いわゆる心の掃除を意味します。心を浄化して物事を如実に知るのが智慧であります。

私の大学時代、私淑していた先生が、常に言われていたことは「良いものには爽やかさがある」という事でした。文学でも音楽でも芸術でも絵画でも、

そしてスポーツでも一流にはみな爽やかさがあります。その極みは自然そのものです。俺が私という執着を離れて、不純を交えず自然体であることが、自然と共鳴するのです。爽やかさは心の浄化で、それは感動です。自然は感動することです。体得されねば意味がありません。その為には広く知識も求め、関心と愛情を持ち、感性を高める。豊かな感性こそ感動を呼び、智慧が発動するのです。古い言葉に「転識得智」とありますが、知識を智慧に転ずるのは、正に感動です。この智慧の眼で、智慧の心で自然との共生を計りたいと思えます。

合掌

(法弘寺住職 名寄市在住)

ヨーロッパアカマツ

